

みどりの東北

MIDORI NO TOHOKU

Vol.
164
東北森林管理局

特集

生物多様性の保全に資する森林施業に関する
講習会の開催 [計画課]

CONTENTS

■美しい森林づくり

地域に求められる「青森ヒバ林の復元」と

「アカマツ防風林の再生」に向けて [下北署]

■我が署の名所

最上峡(山形県最上郡戸沢村) [最上支署]

特集

Special
Feature
Article

生物多様性の保全に資する 森林施業に関する講習会の開催

計画課

国有林野の管理経営に当たっては、生物多様性の保全を含む国有林野の有する公益的機能の維持増進を図ることとされており、生物多様性保全に向けた取組を一層推進することが重要となっています。このため、生物多様性の保全を確保しつつ、適切な国有林管



最上支署会議室での講義

理を実践していくことができる人材の育成を目的として、平成29年5月24～26日、山形森林管理署最上支署管内において、山形県内の4（支）署から12名の受講生が参加し、「生物多様性の保全に資する森林施業に関する講習会」を開催しました。



三脚の使い方を学ぶ受講生

初日は、最上支署の会議室において、座学を中心とした講義を行いました。講義では、①森林生態系のアンブレラ種とされている大型猛禽類（イヌワシやクマタカ）の生



観察調査機材の扱い方を学ぶ受講生

態の説明、②クマタカを指標とした生物多様性の保全に資する森林管理の先事例の紹介、③イヌワシやクマタカの調査方法や観察機材の使用方の説明などを行いました。

2日目は、イヌワシやクマタカの繁殖地を含む国有林の周辺一帯が広く見渡せる場所において、猛禽類の観察調査を実施しました。



双眼鏡と望遠鏡を用いた猛禽類観察調査

観察調査では、クマタカやミサゴといった猛禽類の出現があり、機材の扱い方のコツを掴んで撮影に成功する受講生もいました。



受講生が撮影したクマタカ成鳥

3日目は、クマタカのつがいが生息している国有林において、2日目と同様に観察調査を実施するとともに、クマタカが繁殖の場所として利用している森林の状況を観察しました。また、講習会のとりまとめの際には、クマタカの営巣場所に近接している人工林における今後の施業方法等について、他地域での先行事例等を参考に講師役の職員と受講生が意見交換を行いました。

東北森林管理局としては初の取組み

となりましたが、これまでにない講義メニューにより受講生の評価も高かったことから、引き続き、同様の講習会を岩手県内で開催する予定です。



クマタカが営巣している場所での森林施業に関する意見交換

美しい森林づくり

地域に求められる「青森ヒバ林の復元」と「アカマツ防風林の再生」に向けて

下北森林管理署

下北森林管理署は、本州最北に位置する下北半島の国有林約8万7千ヘクタールを管轄しています。管内の森林は、スギ等の人工林、ブナやヒバ等の天然林から構成されています。

近年、戦後植栽された人工林が伐採時期を迎えてきている中、伐採や再生林に係る低コスト化が民有林・国有林の喫緊の課題となっています。また、日本三大美林の一つである青森ヒバは、その資源が減少してきていることから、スギ人工林の伐採後にヒバ林の復元を図る取組を県内他署等と連携し今年度から本格的にはじめています。

今回は、これらの課題をテーマにした取組と、昨年の台風10号の被害を受けた防災林造成の取組についてご紹介します。

○「青森ヒバ林復元及び低コスト一貫作業システム現地検討会」

平成29年10月19日、「青森ヒバ林復元及び低コスト一貫作業システム現地検討会」を下北流域森林林業活性化センターと共催で開催しました。

当日は、青森県、むつ市、森林組合、管内林業事業者及び県内他署等関係者の総勢60名の参加を得て、午前中は、むつ市大畑中央公民館において「青森ヒバ林復元プロジェクト」の取組に係る説明を行いました。

午後は、当署が低コスト化施策として進めている伐採から植栽までの一貫作業と併せて青森ヒバの復元を図る現地において、スギ立木の伐採から高性能林業機械による効率的な搬出まで一連の流れのデモンストレーションを見学し、伐採がヒバ稚幼樹に与える影響等を確認するとともに、ヒバのコンテナ苗の植栽を参加者に体験していただきました。

今回の検討会では、「ヒバ稚幼樹の保護を考慮した作業は、思った以上に大変だが、

安全を確保しつつ、今後も配慮して作業したい」という感想が事業者から出されたほか、他の参加者からは、「この取組はどのくらいのスパンで行うのか」、「植えた苗木は、何年で使えるようになるのか」などの質問が多数あり、今後の取組を進めていく上で有意義なものとなりました。

当地では、追跡調査を継続的にを行い、関係者に情報提供するなど取り組んでいきます。

○「城ヶ沢アカマツ防風保安林造成植樹」

昨年8月に発生し、各地に大きな被害をもたらした台風10号により、むつ市城ヶ沢地区（村端国有林19林班内）にある防風保安林も壊滅的な被害を受けました。

この防風林は、海から吹き付ける強風から田畑や住宅を守っているほか、海岸林として一般的なクロマツではなく、全国的にも珍しいアカマツ林からできており、歴史的にも数百年前に安東盛親が植栽したとの謂われがあるなど、幾多の変遷を経て長きにわたって地域を強風から守ってきたもので、地域の方々からも大切にされてきた場所です。このため、台風被害の発生後は、アカマツ防風林の再生に対する地元住民からの強い要望がありました。

平成29年10月31日、城ヶ沢町内会をはじめ、むつ市、下北地域県民局、東北森林管理局フォレストボランティア会員及び当署職員総勢35名参加のもと、「城ヶ沢アカマツ防風保安林造成植樹」を行いました。

当日は、前日の荒天とは一転して台風一過の晴天となり、「植樹日和」となりました。

参加者紹介と主催者挨拶のあと、参加者全員が防風林再生への願いを込めて、2年生のアカマツ309本を丸太静砂垣内に1本1本丁寧に植えました。

植栽後は、参加者代表で職員手作りの記念標柱を立て、全員で記念写真に収まり植樹を無事終えることができました。

この植樹では、報道各社も取材に訪れるなど、国土防災への関心の高さを伺うことができたところです。

今後も、「国民の森林」として、地元住民との繋がりを大切にしつつ、地域に貢献できる国有林としての取組を積極的に進めていきたいと考えています。



参加者によるヒバコンテナ苗の植栽



ヒバ林復元プロジェクトの説明



高性能林業機械（プロセッサ）による造材作業



地元住民等によるアカマツの植樹



東北育種場の平成29年度の取り組み

森林総合研究所 林木育種センター 東北育種場長 関 充利

1. はじめに

森林総合研究所の名称については、平成28年5月の森林法等の一部改正により、「国立研究開発法人森林総合研究所」から「国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所」と今年度からなりました。よって、当場の正式名称は、「国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所林木育種センター東北育種場」と、非常に長いものになりました。ただ、通称として、森林総合研究所林木育種センター東北育種場という名を使っていたことで差し支えありません。(写真1)

2. 東北育種基本区林木育種事業推進計画の策定

昨年度末に林野庁において策定された「森林・林業・木材産業分野の研究・技術開発戦略」を踏まえ、「東北育種基本区林木育種事業推進計画」が、林業研究・技術開発推進東北ブロック会議育種分科会の名前で策定されました。

この推進計画は、5年ごとに、林野庁の研究・技術開発戦略が策定されるのに併せて、東北育種基本区における林木育種の推進に関する基本的な事項について取りまとめられたものです。

具体的には、林木育種をめぐる情勢の変化及び林木育種の現状と課題が記述され、優良品種の開発、優良品種の普及、林木遺伝資源の収集・保存・評価等が記載されています。

3. 今年度の東北育種場の重点取組について

今年度の東北育種場の重点取組は以下の通りです。

①特定母樹の開発の取組

昨年度までの特定母樹の開発は、スギ36種類、カラマツ9種類の計45種類が大臣指定を受けたところです。スギ36種類の内訳は、第1世代精英樹から10種類、雪害抵抗性品種から8種類、第2世代精英樹から18種類です。カラマツ9種類は、すべて第2世代精英樹からとなっています。

今年度については、引き続きカラマツの特定母樹の開発に取り組むとともに、スギ雪害抵抗性品種について、早期に採種園の造成に必要な9品種に達するよう開発に取り組んでいます。(写真2)

②マツノザイセンチュウ抵抗性品種の開発

現在のところ、東北育種基本区内では、アカマツ62品種、クロマツ47品種(日本海側33品種、太平洋側14品種)を開発しています。

マツノザイセンチュウ抵抗性品種は、津波や松くい虫等の被害を受けた海岸防災林の造成等に必要不可欠であり、遺伝的多様性を確保するためにもさらなる品種数の増大が必要と考えており、現在開発に精力的に取り組んでいます。

③林木遺伝資源の収集及び遺伝子銀行110番の取組みの推進

林木遺伝子の収集は、品種開発と並んで林木育種事業の柱の一つです、第4期中長期計画では、新需要が期待できる有用樹種について、重点的に林木遺伝資源の収集保存を行うこととしています。

また、林木遺伝子の収集保存の一環として行っている林木遺伝子銀行110番の取組についても、積極的に展開していくこととしています。



写真1 東北育種場正面



写真2 スギ第2世代精英樹候補木



おきたま森の感謝祭

置賜森林管理署

「おきたま森の感謝祭」は、山形県置賜地域の自然環境の恩恵に感謝しながら、森を守り、育てることの重要性を知ってもらい、「みんなで支える新たな森づくり」を推進することを目的に、県や置賜林業推進協議会が主催となり、置賜地域の三市五町の持ち回りで毎年開催されています。

今年度は、九月の三連休初日の一六日に、山形県長井市の「古代の丘」で開催されました。当日は、好天にも恵まれ、澄んだ秋空の下、オーブ

ニングアトラクションでは、長井市特産であるけん玉のパフォーマンスが披露されました。



秋元悟氏によるけん玉パフォーマンス

なお、式典では、地域の森林・林業の推進に功績のあった方や、緑化運動標語・ポスター原画コンクールで入賞された方々への表彰が行われました。また、桜の植樹、高性能林業機械等実演、ネイチャーゲーム体験等もあり、参加者にはハナミズキ苗木及び山菜そばが振舞われました。

当署は、体験コーナーにおいて木工教室を担当し、置賜地域で育った杉を使った巣箱と貯金箱の製作体験を実施しました。



木工品製作体験の様子



幅広い年代層に好評だった木工品製作

普段の業務では木工作業にあまり携わることのない当署職員ですが、この日は木工品製作の指導を熱心に行い、地元の子供たちは勿論のこと、お父さんお母さん方をはじめ、シニア世代まで幅広い年代層の方々に楽しんでいただきました。こうしたイベントを通して、地域の皆様に、森林・林業についての理解を深めていただければと思います。

INFORMATION

新任者
略歴紹介

10月1日付け

津軽森林
管理署長

からさわ さとし
唐澤 智
(長野県)



昭和61.4 長野局作業課
平成21.4 林野庁木材産業課課長補佐
平成24.4 林野庁経営課課長補佐
平成27.1 林野庁業務課企画官

庄内森林
管理署長

きむら かずひさ
木村 和久
(秋田県)



昭和57.4 秋田局作業課
平成21.9 林野庁企画課課長補佐
平成26.4 北海道局宗谷署長
平成27.8 津軽署長

レクリエーションの森に
おける共通ロゴマークの設定
保全課



Recreation
Forests of JAPAN

国有林のレクリエーションの森は平成29年4月現在、全国で約1,000箇所があり、東北森林管理局管内には187箇所が設定されています。

今般、平成29年4月に「森林景観を活かした観光資源の創出事業」に基づき、観光資源としての活用の推進が期待されるレクリエーションの森として、全国93箇所、東北森林管理局管内では11箇所が選定されました。

今回選定されたレクリエーションの森を中心として、観光資源としての活用の推進に当たり、レクリエーションの森を国内外に広く周知し、そのイメージアップとブランド化を図る手段として、共通のオリジナルロゴ

マークが設定されましたのでお知らせします。

シンボルマークは、大きく手を広げた人が中央に立ち、その周りを葉が覆い、1本の木を形成しています。

また、葉の形を利用して、レクリエーションの森の頭文字である「R」を表現しています。

この共通ロゴマークは、今後、林野庁及び関係市町村等のホームページやWEBサイトなどでレクリエーションの森の紹介と一緒に情報発信して参ります。

「わたしの美しい森」
フォトコンテスト

開催のお知らせ

レクリエーションの森をはじめとする森林や山村地域の魅力的な風景・場面を対象とした「わたしの美しい森」フォトコンテストがH29.12.11～H30.2.13の募集期間において開催されます。

日本国内、平成26年1月1日以降の写真が対象です。詳細は次号でお知らせします。



マダニ顛末記

津軽白神森林生態系保全センター 専門官 有本 実

今年はマダニによる感染症のニュースが飛び交いましたが…実は私、一昨年2箇所、昨年4箇所と立て続けに刺され、そのたびにピンセットで引っこ抜いていました。今回はマダニに刺されまくった2年間を振り返ってみます。

写真①は昨年5月14日に登った、青森県は深浦町の茶臼山山頂からの1枚です。向白神岳を背景にミネザクラが満開で、山頂に2時間近く滞在していたのがいけなかったのか、下山後に右足を2箇所も刺されていました。津軽の山を歩いていると、足音や呼吸を察知してか私に忍び寄るマダニに時々出くわします。その時点で気付けば良いのですが②、知らぬ間に衣服の間から入りこみ口器を刺してきて、しかも痛みも何も感じないから厄介なのです！



①満開のミネザクラを撮影中に…



②刺される前に捕獲



③右スネを刺された！



④微動だにしない2匹

③は一昨年、人生で初めてマダニに刺された時の様子です。噂通り、なるほど口が皮膚に固着されて外れる気配がありません。試しに風呂に入って石鹸で洗ってみましたが、ジタバタもがく程度で温水シャワーも何のその。このまま血を吸わせて肥大化する様子を定点観察しようと、定規を当ててまず1枚撮影…さてよ、健康に害は無いのか？と色々調べてみると、様々な感染症にかかる恐れがあることが分かり、この企ては断念しました。

昨年茶臼山で刺された2匹は、皮膚から外した後、に湿らせたティッシュとともにタッパーに入れて観察してみました。フタを開けてハートと呼吸を入れると、二酸化炭素に反応してトコトコ歩きますが、普段はほとんど動きません④。この2匹はなんと冬を越し、1匹は今年7月半ばまで、もう1匹は9月1日まで生き延びました。マダニは数年に渡る生涯で僅か3回しか吸血しないと言いますが、その間ひたすら動物に乗り移るチャンスを伺ってじっと待ち続けるのでしょうか。

この2年間の経験から、今年は入山前の虫除けスプレーを習慣化したところ、効果テキメン！1度も刺されずに済みました。入山前の一噴射を忘れなければ、必要以上に恐れることはなさそうです。



森林官からの手紙



アカマツ樹種転換で松くい虫被害の北上を阻止

盛岡森林管理署 岩手森林事務所 森林官 川村 晃路

ここは、岩手県岩手郡岩手町にある岩手森林事務所です。

約5、300haの国有林を管轄する当森林事務所は、岩手県北部に位置し、なかなか丘陵林が多いため、体力的にも比較的歩きやすい管内ではないかといえます。また、国有林が小面積で点在しており、周辺は農耕地や民有林と入り組んだ配置となっているため境界は複雑になり、境界管理は重要な業務の一つです。

さて、平成28年4月からスタートした第五次国有林野施業実施計画では、地球温暖化防止に向けた森林吸収源対策の一つとして、森林資源の若返り「主伐」があります。中でも、主伐期に達しているアカマツ林については、松くい虫被害拡大防止のため、必要に応じ「アカマツ林の樹種転換」を実施することとされており



アカマツ樹種転換エリアの皆伐作業

松くい虫被害の先端地域になっている当森林計画区は、被害の拡大(北上)阻止はもとより、県北部の「南部アカマツ」資

源を保全すべく関係機関と協力し、民国連携による樹種転換等の森林整備を行うため、平成28年7月27日協定が締結されました。

未被害地域である岩手町南部に、防除帯として東西14キロ、南北2キロにわたるアカマツの空白地帯を設け、マツノマダラカミキリの移動(北上)を防ぎ、「南部アカマツ」資源を保全していく県内初の試みです。そのエリア内の国有林・民有林面積は約1、873ha。そのうち、アカマツ約600haでは皆伐や間伐を実施していきます。

当該箇所の国有林物件は、立木システム販売により3者と契約し、伐採時期を10月3月とする条件のもとにスタートしました。

アカマツ林の更新方法は、萌芽更新による広葉樹林とカラマツ低密度植栽(1、500本/ha)による新植を併せて行



多様な森林づくりの概要

い、森林総合研究所とプロット調査を行いながら「多様な森林づくり」に取り組んでいきます。

この更新方法が可能となれば、森林施業の低コスト化、多様な森林への誘導による多面的機能の発揮など公益的機

能が充実され、今後の林業に与える影響は大きいのではないかと考えております。

このほか岩手町には、癒しの効果・病気の予防効果が科学的に認められた「森林セラピーロード」があります。今年の6月24日には、医師であり登山家の今井通子さんを講師に散策会を開催しました。子抱国有林にある「ゆうゆうの森」協定エリア内の2コースを使い、気軽に森林浴を楽しむことができる子抱コース、植物が豊富に自生し、森林浴を十分に堪能できる嵐山コースがあります。

森の中で深呼吸をしたり、立ち止まって風の音・鳥や虫の鳴き声に耳を傾けたり、五感を使い、木の香りや風の感触、太陽の光を感じる事が大切で、散策会の講師の私も体験しました。



森林セラピーロード散策会でリフレッシュ

森に何かをしに行くのではなく、森に何かをされに行くという意識を持つことがポイントで、ストレスの解消と気分のリフレッシュ、病気の予防に一度訪れてみてはいかがでしょうか。



秋



最上川舟下り (戸沢村)



冬

我が署の名所

最上峡 (最上郡戸沢村)

山形森林管理署最上支署管内

山形県を流れる全長229kmの最上川は、山形県南部の吾妻山から米沢盆地、山形盆地、庄内平野へと北上し日本海へと注ぎ込みます。

昔は舟を使った交通手段が盛んであったことから、生活や文化の大動脈として利用され、今でも県民に「母なる川」と親しまれている雄大な河川です。

最上支署の管内には、最上川の北西に位置する「最上峡」があり、春は山桜が山々を彩り、夏は見渡す限りの新緑、秋は最上川の両岸に迫る紅葉が水面に映しだされ、冬は水墨画のように、四季折々の風景が楽しめる渓谷で、一年を通じて多くの観光客で賑わっています。

最上峡は国道47号線、JPR陸羽西線と並行しており、車窓からの景色も良いのですが、この最上峡の景色を堪能する手段の一つに、「舟下り」があります。

舟下りのコースには、松尾芭蕉も旅したルートのうち、戸沢村古口(古口港)から草薙(草薙港)までの約12kmを最上川の流れに身を任せ、1時間かけてゆったりと川を下る定期航路などいくつかのコースがあります。

このコースには、途中落差120mの名瀑「白糸の滝」や、縁結び神社ともいわれている「仙人堂」などを舟上から眺めることができます。

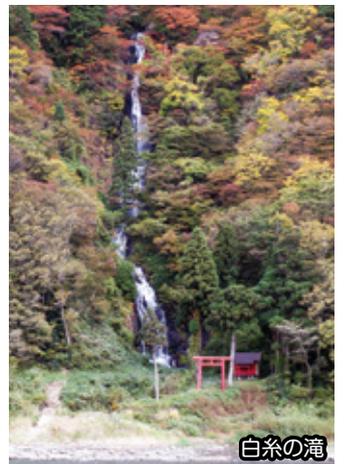
船頭たちの鍛え上げた「最上川舟唄」や、ユニークなトークを聞きながら、地上では味わえない、舟からの風情を体験してみたいかがでしょうか。

特に、これからの季節は紅葉も見頃を迎えますし、12月からは「こたつ舟」も運行していますので、雪深い冬でも快適に、最上川の雄大さと山々の自然の景色を楽しむことができます。



山形森林管理署最上支署

〒999-5314 山形県最上郡真室川町大字木ノ下字新林1793地内
(仮設事務所:平成29年7月31日~当面の間)
TEL 0233-62-2122 FAX 0233-62-2706



白糸の滝

